



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

## 桃介橋

長野県木曾郡南木曾町読書

長野県南西部。JR南木曾駅から徒歩五分ほど、木曾川に沿って歩を進めると、川面にそびえる三基の橋塔にケーブルで吊り下げられた木製の橋が見えてくる。一九二二（大正十一）年に架設された橋長二四七呎の桃介橋<sup>ももすけはし</sup>。現存する木製補剛桁吊橋としては国内最古最長であり、国の重要文化財に指定されている橋梁である。橋名はこの地で電力王として名を馳せた実業家、福澤桃介の名に由来する。

福澤諭吉の女婿であり、炭鉱業、製紙業、紡績業といった産業界で頭角を現した桃介は、木曾川における水力発電事業に打って出る。桃介橋はその発電施設の一つである読書発電所建設に向けた、資材搬送ルートとして整備された。言うなれば工事前仮設道路だが、その壮麗さ、存在感は特筆に値する。あえて川幅の大きな位置に架けられたようにも見える。当時の資料などを展示する福沢桃介記念館の案内役を務める女性は「少し見栄を張ったのかもしれませんがね」と笑いながらも「でも強い信念を抱いた桃介さんだからこそ実現できた架橋だったことは間違いありません」と話す。

桃介はこの流域に次々と発電所を建設し、関連する架橋は一〇橋あまりに及ぶ。建設にはアメリカ人技術者も関わっていた。桃介橋の威容に、当時米国で最盛期を迎えていた吊橋の意匠が反映されているとの指摘がある。なるほど、規模はともかく橋塔のアーチや補剛桁などはニューヨークのブルックリン橋を想起させる。一方、今回の取材では施工に携わった日本人技術者の名を、残念ながら耳にすることができなかつたのが心残りだった。



桃介橋は1993（平成5）年に大規模改修された。土木構造物を遺産として継承しようとする機運が急速に高まった頃で、その事業計画においては「土木」を遺す意義と、生かす技術を軸に、文化・土木の両側面から熱い議論が交わされたという。桃介橋は現在に連なる土木遺産継承のあり方を探る嚆矢でもある。写真は、床版に遺るかつての資材搬送用トロッキのレール。